日本臨床発達心理士会神奈川支部

NEWS LETTER かながわ

2010 年度第２号(通巻第８号)
2011 年２月５日　神奈川支部　発行
連絡先 e-mail: jacdp-kanagawa@hotmail.co.jp

巻 頭 言

神奈川支部 支部長 関戸 英紀

教育委員会の専門家チームの一員として、時々小学校を訪問します。そんな中で、ここ数年、考えていることは、今、学校に、「スクールスタンダードの策定」と「授業のユニバーサルデザイン化」が求められているということです。

最近、横浜市や川崎市内の小学校において、スクールスタンダードを策定する学校が増えてきています。クラスにとどまらず、学校全体でルールを確立しようとする動きです。そして、このことによって、結果的に、どの児童にとっても生活しやすい･学びやすい学校づくりにつながっていきます。

スクールスタンダードを策定する観点として、次の６点が考えられます。①発達障害のある児童生徒にとっても、生活しやすい・学びやすい環境を作る。②スタンダードは、学校全体の(支援の)規準である。③児童生徒の視点で学校生活を見直す。④支援方法を統一することによって成果が上がる。⑤児童の不安や不公平感を解消する(例えば、席替えをする場合、隣のクラスでは児童が自由に決めているのに、自分のクラスでは担任が決めている)。⑥学校全体(全教員)で一人ひとりの児童を育てる。

次に、授業のユニバーサルデザイン化です。まず、「バリアフリー」と「ユニバーサルデザイン」の違いについて触れておきます。前者は、特別な人に対して、特別な支援や配慮を行うことを指します。電車やバスに設けられているシルバーシートがその一例です。それに対して後者は、一つのものをできるだけ多くの人が、一緒に使えるようにしようという考え方です。例えば、横浜市営地下鉄の“全席優先席”がそれです。

さて、学年が上がれば上がるほど、児童生徒の学習面での理解度に様々な差異が生じてきます。しかし、どの児童生徒も、学びたい、理解したい、できるようになりたいというニーズをもっています。これらの学習上のニーズを実現するために、授業のユニバーサルデザイン化が求められています。すなわち、どの児童生徒も参加でき、しかもその子どもなりに理解や達成感が得られる授業を志向していこうということです。佐藤(2007)は、授業のユニバーサルデザイン化を、発達障害等のある児童生徒にとっては「ないと困る」支援であり、どの児童生徒にとっても「あると便利な」支援である、と説明しています。

スクールスタンダードの策定と授業のユニバーサルデザイン化が実現することによって、学校は多くの児童生徒のニーズにこたえられる、と確信しています。

神奈川支部研修会報告

テーマ：幼児期の高機能発達障害の理解と支援のあり方
日時：2010 年 12 月 18 日（土）13：30〜16：30
場所：ウィリング横浜　５階研修室
講師：今井　美保氏（横浜市西部地域療育センター長・発達精神科医）

年間テーマ「生涯発達支援：発達障害のアセスメントと支援方法」のなかで、今回は「幼児期」に焦点を当て、「幼児期の高機能発達障害」について「早期発見」と「親支援」等を中心に、地域療育センターの医師として活躍されている今井先生ご講演いただきました。

学齢期・青年期以降の臨床現場には、知的に遅れがなく発達障害かどうかがわかりにくいタイプの方たちを、「こじれてしまう前にできるだけ早期から支援したい」という願いがあります。では、「早期発見」とは「いつ」なのでしょうか。また、早期発見には様々な問題があります。そんな素朴な疑問に今井先生は丁寧に答えてくださいました。

まずは、「早期発見をめぐる疑問」として「診断の安定性」「早期兆候」「経過・転帰の多様性」「連続性」「予後の予測因子」「早期介入の効果」等があるとのこと。「1 歳半」という年齢は、歩行や手指操作が可能になり身振りや言葉によるコミュニケーションや延滞模倣もできるようになる時期であり、自閉症の早期発見には最も重要な時期と考えられているそうです。しかし、自閉症のスクリーニングですべての「自閉症スペクトラム症候群（ASD）」を同一時点で感度・特異度ともに高く振り分けられる行動マーカーは見つかっていないとのことです。発達経過における特性の現れ方として、「アスペルガー症候群の特徴は危機的な状況に遭遇した時に顕在化し、危機を過ぎた時、穏やかな形となって背景に退く」（青木省三）という見解もあり、「早期介入」の考え方として「as early as possible」から「optimal intervention」へというような視点もあるのではないかとのことでした。

また、「親支援」とは「親の自己決定を支援すること」なのではないかと、そして、支援者である私たちには「役割と「限界」があり、「見通しをもってかかわること」「関係機関と連携すること」が大切で、「伝え方の技術」の専門性が支援者に問われているとの指摘もありました。

毎日、障害程度が軽度な高等部知的障害部門で働いている私は、「どうして親は生徒の障害受容ができないのだろう」と頭を抱えて悩んでいました。今井先生の講演を聴いてハッとしました。「伝え方の技術が私に足りない」「ここに進学してくる親は子どもの障害にむきあってからの時間が短い」ということを。そして、講演後、私だけでなく多くの方が暖かくすがすがしい気持ちになったのではないでしょうか。

神奈川県支部研修会についてのアンケート結果

（参加者のうち提出された 38 名の結果です）

１．今回の研修会の内容について

１）自分の知識の広がりにつながるものでしたか（５択）。

「とてもそう思う」１４名（３７％）、「そう思う」２４名（６３％）

２）臨床現場に役立つものでしたか（５択）。

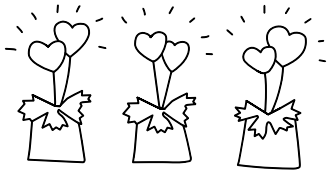
「とてもそう思う」１７名（４５％）、「そう思う」２０名（５３％）、「どちらでもない」1名（２％）

３）内容へのご意見をお聞かせください（自由記述）。

・広い視野に立ち系統的で奥深さを感じた。専門的な内容が、臨床として語られ良かった。
・レジリエンスの視点や optimal　intervention が参考になった。
・連携が取れ、相談できるドクターがいて心強い。あたたかな気持ちになった。
・質疑応答が具体的でわかりやすく有意義だった。質疑応答やディスカッションが活発で興味深かった。意見交換がよかった。様々な立場からの意見がきけてよかった。質問の時間が多くとってあり有意義だった。
・現場の意見や疑問を展開していけるとよい。　　など

２．今後の神奈川県支部で希望する研修会・研究会について（自由記述）

・フォローになった子たちの個別指導に関する事例。
・今回のような、発達的なつながりを視野に入れた話。
・巡回相談について。
・学校の巡回相談員から、学校場面での具体的な支援の方法をききたい。
・抗精神薬、精神安定剤など薬の話。
・ADHD や自閉症の薬物療法について。
・児童虐待について。
・発達障害と非行、虐待などのテーマ。
・WISC-Ⅳについて（２名）。
・道徳性の発達、向社会性の発達など、基礎的な発達心理学のテーマ。
・障害児教育の歴史
・横浜市教育委員会が開発した横浜プログラムについて。
・乳幼児期の連携のための研究会や交流会のようなものがあるとよい。
・スーパーバイザーのもとにメンバー同士の交流もできたらよい。　　など

３．その他

＊研修会や学会へのご協力を申し出てくださった方が１１名いらっしゃいました。
ありがとうございます。